

ホタルのニュースレター

日本ホタルの会 2013 / 12 第 61 号

小西正泰先生を偲んで

日本ホタルの会副会長 鈴木 浩文

2013 年(平成 25 年)8 月 25 日に小西正泰理事がお亡くなりになりました。享年 86 歳でした。先生は 1927 年(昭和 2 年)8 月 9 日兵庫県西宮市のお生まれで、北海道大学農学部農業生物学科をご卒業後同大学院に進まれました。その後、キクイゾウムシの分類の研究で農学博士の学位を取得されています。昆虫学の中でも文化昆虫学、昆虫学史、文献書誌学など日本における虫と人との関わりの歴史的な研究分野の開拓に大きく貢献された方で、「虫の文化誌」、「昆虫の本棚」、「虫と人と本と」など訳書も含めて大変多くの著作があり、小西正泰・長谷川仁・大野正男・白水隆の四氏で「虫の本の四天王」と称されています。また、北興化学工業株式会社の技術顧問の他に学習院大学講師、恵泉女学園短期大学講師などを歴任され、当会の理事や野川ほたる村村長、東京ホタル会議議長、日本アンリ・ファール会理事なども務められました。

日本ホタルの会では、1997 年(平成 9 年)から理事をお引き受け頂いておりまし

た。1992 年(平成 4 年)10 月に開催された第 1 回のシンポジウムでは「ホタルの文化誌」という演題でご講演を頂き、当会の機関紙(ホタルと人里 1 号)に掲載されております。

また、当会発行のニュースレターにも以下多数のご執筆を頂いております。

「中国のホタル文化誌」(1997 年 8 号)
「会の発展のために提言を」

(1999 年 13 号)

「蛍狩りのわらべ歌」(2001 年 18 号)

「台湾のホタル近況」(2003 年 24 号)

「キイロボタルこぼれ話」(2004 年 30 号)

「薬用にされたホタル」(2006 年 36 号)

「私とホタル」(2009 年 49 号)

小西先生は兵庫県のお生まれですが、幼少時代は秋田県の花岡鉱山(現大館市)で過ごされ、青森県立弘前中学校(現青森県立弘前高等学校)に入学されています。当時の「生物班」には昆虫好きの同級生がお二人おり、御三人共に大学に進学され昆虫学を専攻し、学位を取得して昆虫のプロとして活躍されています。その同級生のお一人は故斎藤和夫先生

(弘前大学理学部教授)で、私(鈴木)の恩師であります。当時のことを詳しくお伺いすることなく、お二人とも他界されてしまいました。お聞きする機会はいつもあったのですが、「あのときお伺いしておけば」と

いう後悔だけが、いつも心に残ってしまいます。

ご冥福をお祈り申し上げます。

(すずき ひろぶみ)

小西正泰先生と東京ホタル会議

～陸生ホタル生態研究会～

日本ホタルの会理事

陸生ホタル生態研究会事務局長

小俣 軍平

1：「野川ホタル村」での出会い

小西正泰先生との出会いは、1986年のことでした。当時、私は新設された八王子市立山田小学校で、校地内に環境教育用の施設として面積700㎡程の植物園を造り、ゲンジボタルを飛ばしたいと取り組んでいました。しかし、校長をはじめ施設造りの経験の有る者は皆無で、矢島稔先生・荻野昭先生のご指導をいただき手探り状態での取り組みでした。そんな時、朝日新聞に小金井市の「野川ホタル村」のことが載りました。

「これは・・・」というので、早速この会を訪ねてみました。そして、当時活動の中心だった彦坂和夫先生、村長の小西正泰先生に初めてお会いしました。

2：東京ホタル会議から板当沢ホタル調査団

野川ホタル村の中心メンバーの奔走で、1994年に東京都下の自然保護団体や、都議会、多摩動物公園、三多摩にキャンパスを持つ大学、高校関係などにも呼びかけて「東

京ホタル会議」が設立され、小西先生がその初代の議長に着かれました。この頃小西先生は、日本ホタルの会の理事でも有りました。当時、東京都下の三多摩地方は、バブル経済の宅地開発ラッシュがいくらか収まっていたましたが、状況は依然厳しく、毎年開かれた東京ホタル会議のサミットや研究会では、環境保全のシンボルとして都下におけるゲンジボタルの保護運動が、サンクチュアリー造りを中心に熱っぽく語られていました。

こうした運動の盛り上がりの中で、1998年9月に東京ホタル会議の中に、東京都八王子市上恩方町の「板当沢」(イタアテザワ)をフィールドとする「板当沢ホタル調査団」が設立され、団長に議長の小西先生が就任されました。ここでの9年間、小西先生は、まったくの素人集団を率いていつも優しく根気よく指導されて、ひとかどの生態研究のできる集団を育てあげてくださいました。そして、ここでの調査研究の結果は、2006年に「日本産ホタル10種の生態研究」とし

て、調査団から自費出版されました。

3：陸生ホタル生態研究会時代に

2007年10月、板当沢ホタル調査団の遺産と組織をそのまま引き継ぐ形で、新たに陸生ホタルの生態研究を主目的にした全国組織の「陸生ホタル生態研究会」が発足し、会長に小西先生が就任されました。それから今年で7年目になります。陸生ホタルの生態については小西先生のご指導の下で、その後も新たな発見が相次ぎ、2013年度に、それらをまとめて「日本産ホタル10種の生態研究」の改訂版に当る、種別のCDの作

成が進んでいました。8月小西先生は、その刊行をみることなく永眠されました。痛恨の極みです。私たちは先生の志をしっかりと継承し、これからも日本産ホタルの生態研究に邁進していく所存です。これまで16年間にわたり全国の皆さん方から寄せられましたご厚情にたいし厚く御礼申し上げますと共に、今後ともよろしくご指導くださいますようお願い申し上げます。

(おまた ぐんぺい)

故 小西正泰理事を偲んで

【薬用にされたホタル】を再掲載させていただきます。

ホタルのニュースレター36号（2006年3月）より抜粋

薬用にされたホタル

日本ホタルの会理事 小西正泰

現代人類の寿命が古い時代よりも著しく延びたのは、医学と薬の進歩に大きく負っているといわれる。この薬は、かつては動・植・鉱物など自然物が材料として利用されてきた。薬材として植物が主体であったため、中国や日本では本草（ほんぞう）と称していた。

ところで、ホタルは暗所で発光することが注目されたためか、古代の中国本草書で薬用として記され、その影響を受けて日本でもホタルは薬材として認められていた。私の手もとに

は薬用昆虫に関する内外の文献が多数あるが、ここでは東洋（中国、朝鮮半島、日本）におけるホタルの「適応症」などについて紹介することにしたい（用法は省略）。

■ 中 国

まず中国最古の本草書といわれる『神農本草経』（2世紀後半に成立）では、虫類29種を上・中・下に分け、「下品」（治療薬、有毒）として「萤火」（ホタル）が目を明るくすると書いてある。これは暗いところで光ることからの連想であろう。それ以来、中国ではホタルが本草書や薬虫書に連綿と命脈を保ってきている。

火 螢

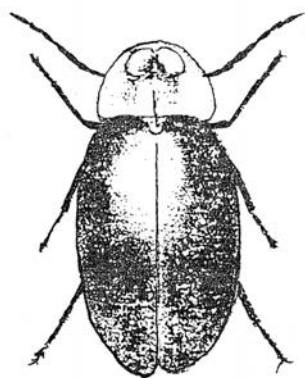


蠋



図1 『本草綱目』より

代表的な中国本草書である李時珍の『本草綱目』52巻（1590）は、自説のほかに先行文献の諸説もとり入れて構成されている。本書の「萤火」（図1）には次のような効能などが記される。——味は辛くて毒はない。ホタルの主な効能は、邪をよく退け、目を明るくする、青盲（青の色盲）を治す、小児のやけど、熱気、腹の虫の毒、神精に通ずるなど。薬には「飛ぶ螢」（有翅の成虫）を用いる。萤火丸、冠将丸、武威丸などと称する丸薬を調剤して、諸病の治療や戦傷除け、盗賊除けなどに使用する。そのほか、7月7日の夜にとったホタル14匹を髪に撚りつけると黒くなること、ホタル14匹を大きな鯉の胆のうの中に入れ、百日間陰干ししたものを粉末にして少量ずつ目につけると、目を明るくするという。



褐螢虫

その後の多くの中国書でホタルの項を拾ってみると、適応症は上記と大同小異である。ホタルの種類は *Luciola vitticollis*（褐螢虫、図2）および *L. chinensis*（中華黃螢）で、ほとんどが前者である。

図2 蔣三俊（1999）より

■ 朝鮮半島

朝鮮半島については、岡本半次郎・村松茂の「食用及薬用昆虫ニ関スル調査」（1922）によると、ホタルの適応症は、てんかん、眼病、中毒、梅毒、目を明るくし盲を治す、虫毒、青盲などである。朝鮮半島では『本草綱目』など中国書の影響はあまりなかったようである。

■ 日 本

日本には、上述の『本草綱目』が1604年以前に伝来している。その後、和刻本が刊行されたりして流布し、わが国の本草学や博物学に多大の影響を与えた。

貝原益軒の『大和本草』16巻（1709）は、『本草綱目』を金科玉条としないで国産品（「和品」）を重視し、仮名（片かな）交り文で書かれた異色の本草書で、オリジナリティーがある。虫類58種を「水虫」と「陸虫」に大別し、「螢火」は陸虫に分類されている。『本草綱目』で螢火丸の薬効があるというのに対し、益軒は「イフ（ブ）カシ」と疑問を表明している。

はるかくだって大正期になると、昆虫学者の三宅恒方が「食用及薬用昆虫ニ関スル調査」（1919）を全国規模で実施して発表した。ホタルの薬用については、ゲンジボタルとヘイケボタルの名称では傷薬、腫物の吸出し、「ほたる」（ゲンジ、ヘイケとその他）では傷、腫物、歯痛、咳、百日咳、指の痛、解熱、霍乱（日射病）、おこり、腸痛、下痢、血止め、禿頭病（はげ）などを県別に挙げている。この報告書が日本における薬用昆虫についての基準になっている。

次いで適応症が最も多いのは、梅村甚太郎の『昆虫本草』（1943）である。腫物（吸出し）、ひょうそ（指先の化膿）、痔、血止め、利尿、寝小便、腎臓病、産後の下血（ホタルの卵の黒焼粉を服用）、疔（ちょう。顔などの腫物）、強心剤、解熱、腰痛、霍乱、禿頭病（粉末の外用）など。

かつて滋賀県守山町（現在は市）はゲンジボタルの多産地として知られ、南喜市郎の『ホタルの研究』（1966）によると、明治～大正期にはホタルを大量に捕って売る「ホタル問屋」が何軒もあったという。ホタルの死虫も大量に出たので、それを干して薬種商に売ったそうである。また、同書によると、ゲンジボタルには独特の異臭があり、生体を口に含むととても苦くて長く口に残るという。

神田左京は『ホタル』（1935）のなかで、ホタルを入れて竹を煮ると、竹がやわらかくなるという伝聞を紹介している。

鈴木棠三の『日本俗信辞典一動・植物編』（1982）の民間療法には、ホタルの光は、できもの・腫物・指病によい。とげぬき・傷には、つぶして米と練り用いるなどがある。また、薬とは対極に位置する俗信に、ホタルをつぶすとできものが出る、（ホタルを）つまんだ手で眼を擦ると眼がつぶれる、（ホタルを）捕ると病気になる、などとあるのはおもしろい。

以上のように、ホタルは多くの病気のクスリになるが、その背景にはホタルは暗いところで光を放つ、そこからホタルには不可思議な能力があるというイメージが生まれる。この光ることから目が明るくみえるようになる、ハゲ頭が治るなどの俗信が生まれたのであろうが、この最後のものはホタルの粉末を頭に塗ると、ますます光り輝いて「逆ボタル」になるのではなかろうか。

ホタルのクスリ以外の医学的効用の一つに、ホタルの蛍光物質を利用して食品などに混入している微生物の存在を検知することがある。

また、ホタルの蛍光物質とガン細胞との「粘着」によりその細胞の活動情報を測定する（蔣三俊、1999）などの効用もある。

終わりに、現世のホタルをとりまく状況は保護・保全の一色であり、それ以外の目的での利用は「想定外」と思われる。

第 20 回日本ホタルの会シンポジウム報告 「ホタルを通じて身近な自然環境を考えるーヒメボタルー」

2013 年 11 月 16 日工学院大学新宿校舎において、工学院大学八王子キャンパスにほたるを飛ばす会との共催のもと、日本ホタルの会シンポジウム「ホタルを通じて身近な自然環境を考えるーヒメボタルー」を開催しました。今年のテーマは、ゲンジボタルやヘイケボタルから離れヒメボタルを題材に選びました。ヒメボタルは、本州はじめ九州、四国などに広く分布し、フラッシュのように比較的強い光で明滅するホタルなので、ゲンジ・ヘイケのように多くの人を魅了する存在です。と同時に、一言では語りにくい不思議なベールに包まれたホタルでもあります。観察地ひとつをとっても、東京や神奈川では平地での生息が少なく山地に多くみられます。名古屋では市街地にある城の外堀に生息しています。西日本では一般的なホタルですが、東日本ではなじみの薄い地域が多くあります。その一方で、東日本にも東北二戸市の折爪岳では多くのヒメボタルが観察されており、観光シンボルの一つになっているなど、ヒメボタルは生息地域毎の特性にあわせ、多様な生息地に生息しています。

このホタルについて、良く知り、地域環境との関わりや保全の重要性などをみなさんと考えていくため、ヒメボタルを取り巻く現状や生態について、さらには発生地（名古屋城）の状況・保全活動やホタルの写真の撮り方・魅力などについて講演をお願いしました。また、工学院大学からは、発光に係る遺伝子的なアプローチと工学院大学八王子キャンパスにほたるを飛ばす会の活動状況について発表が行われました。

シンポジウムは、工学院大学新宿キャンパスに二十数名の参加を得て開催いたしました。はじめに日本ホタルの会鈴木副会長から「ヒメボタルを取り巻く現状」と題し、前述のようなシンポジウムの趣旨



を説明いたしました。次に、当会理事であり陸生ホタル生態研究会のメンバーである小俣理事から小俣氏らが長年の観察、研究で明らかにしてきたヒメボタルの生態、分布等について報告がなされました。報告では、九州、四国、中部、東海、東北など各発生地の環境、



成虫の生活、発光、交尾、幼虫ではふ化までの時間差や何を食べているのか、蛹化など長い間継続して観察しなければ決して得ることのできない貴重な情報が提供されました。

次に、名古屋市「名古屋城外堀ヒメボタルを受け継ぐ者たち」の安田さんから名古屋城外堀に生息するヒメボタルについてご講演いただきました。講演は、大都会の真ん中でヒメボタルの大発生が確認された時のことから、発見者であり保全の中心人物であった竹内氏の活動や功績について言及され、プレゼンテーションは、現役の先生らしく子供たちが作り歌い継がれている歌を歌って紹介していただいたりと、とてもユニークで感動的なものでした。名古屋外堀での活動は、

発見者であり保全の中心であった竹内氏の意味を継ぐ方々によって支えられ、活動の一部はヒメボタルの光る深夜に行われていて、ゲンジ・ヘイケとは異なる魅力も感じさせてくれました。

最後にホタルの写真の撮り方について、当会の宇田川理事から紹介がありました。デジタル一眼レフカメラが普及し写真撮影を趣味とする人が増える中で、ホタルに影響を与えない正しい、適切な写真撮影手法が紹介されたことは、きれいな写真を撮るというだけでなく観察マナーを考える上でも重要と思います。

さらに、ホタルに関連する報告として、工学院大学工学部石井さんと工学院大学八王子キャンパスにほたるをとばす会佐藤さんから報告がありました。石井さんからはホタルの遺伝子についての報告をいただきました。やや難解でしたが、こうした科学的アプローチも大切であると感じました。佐藤さんのご報告からは、実験室的な飼育に試行錯誤しつつ取り組んでいる様子がうかがえました。先輩から後輩へ知見、技術そして環境を考えることを受け継いでいき、キャンパスにほたるが飛び交う日が来ることを期待しています。

講演終了後、総合討論という形で全体を通じての質疑応答、意見交換を行いました。意見交換では、ホタル増殖において種ボタルの供給を環境と多様性に配慮し安易な移動はしないことが望ましいといった意見が述べられるなど、短い時間でしたが活発な意見交換が行われ、閉会となりました。

最後に、日本ホタルの会のシンポジウムは、今年も多くの示唆に富んだ内容であったと思います。できることならばもっと多くの方々に参加いただき問題を共有できることが必要と痛感しました。次の開催に向け内容とともに検証していきたいと考えています。

2012 年度日本ホテルの会業務報告

日本ホテルの会の 2012 年度活動状況について、次のとおり、報告します。

1. 会の体制

(1) 会員数

2012 年度期首及び期末の会員数は次のとおりとなっています。

年 度	法人会員	公的会 員	個人会員	計
2012 年度期首	1	5	8 6	9 2
2012 年度期末	1	5	8 7	9 3

(2) 役員体制

2012 年度の役員は次のとおりです。役員改選にあたり顧問を設けました。

名誉会長 矢島 稔

顧 問 小西正泰

会 長 本多和彦

副 会 長 鈴木浩文

理 事 川村善治、荻野 昭、小俣軍平、井上久彌、井上 務、古河義仁、
渋谷桂子、宇田川弘康、後藤洋一

会 計 井上久彌

監 査 井上 務、後藤洋一

事 務 局 井上久彌、井上 務、古河義仁、渋谷桂子、宇田川弘康、後藤洋一、
立田美枝子

事務局業務は、事務局に会長と副会長を加えた体制で進めています。

2. 財政及び運営

(1) 財政

日本ホテルの会は、会員の皆様の会費によって運営されています。2012 年度の会費収入は、337,000 円となっています。これに利息を加えた総収入は、337,017 円となっています。一方、支出は、299,687 円となり、単年度収支で 37,330 円が残ることになり、次年度へ繰り越すことになりました。今期の繰越金は、1,273,076 円となっています。2012 年度も財政的には収入と支出のバランスが取れた結果になりましたが、収入、支出とも

に規模縮小傾向にあり、会の活動も活性が失われる懸念があります。こうした健全な運営を継続しつつも、会の活動の活性化を積極的に進めていかなければならないと考えています。

(2) 運営

当会の運営は、理事会及び事務局会議により行っています。

理事会 会の活動計画の決定、財政状況の確認、次期役員選考など重要課題への対応を審議しました。

2012 年 8 月 26 日

2013 年 2 月 2 日

計 2 回開催

事務局会議 理事会で決定した活動計画を実施するとともに、ニュースレターの内容や講師派遣依頼への対応の検討など、会の具体的な運営を協議、決定しました。

2012 年 5 月 19 日

計 1 回開催

視 察 自然環境の再生事例（ビオトープ整備・管理）を視察するため、横須賀市長井海の手公園ーソレイユの丘ーを訪問し、ビオトープ内でのヘイケボタル生息を進めている大場信義氏から説明を受けました。

2012 年 9 月 29 日

計 1 回開催

3. 活動報告

主な活動として、ニュースレターの発行、ホームページによる情報発信、各種イベント開催、講師派遣を行っています。2012 年度は、東京都町田市片所谷戸（かたそやと）のホシザクラ開花に合わせ、野外視察を含む談話会を開催しました。片所谷戸では、7 月 1 日に観察会も実施しましたが、これら片所谷戸の催しは、いずれも小山のホテルと自然を守る会との共催で行いました。11 月には工学院大学との共催で第 19 回日本ホテルの会シンポジウムを開催いたしました。2 回目の談話会は、3 月 30 日に地球環境パートナーシッププラザで開催しました。

(1) ニュースレターの発行

ホテルのニュースレター第 56 号、第 57 号、第 58 号を発行しました。

(2) ホームページによる情報発信

ホームページでは、当会の活動方針をはじめ、イベント案内など日本ホテルの会の情報を発信しています。現在、ホームページの内容についてリニューアルの検討を進めています。

2012 年度末までのアクセス数

361,000 件

(3) イベント活動

観察会	2012 年 7 月 1 日	町田市片所谷戸
シンポジウム	2012 年 11 月 10 日	工学院大学新宿キャンパス
	テーマ	
		“ホテルを通じて身近な自然を考えるーヘイケボタルー”
		日本ホテルの会・工学院大学共催
談話会	2012 年 4 月 21 日	町田市片所谷戸
		町田市片所谷戸における自然環境保全の取り組みについて、小山のホテルと自然を守る会の活動について現地を案内していただきながらお話を聞きました。
	2013 年 3 月 30 日	地球環境パートナーシッププラザ
		日本ホテルの会講師派遣プログラムの中から鈴木副会長による遺伝子解析のお話を聞きました。

(4) 講師派遣

2012 年 4 月 28 日	岐阜県揖斐郡大野町
2012 年 6 月 17 日	横須賀市逸見地区観察会

4. 2012 年度活動について

日本ホテルの会は、ホテルを里山の象徴と考え、ホテルの棲む豊かな環境を取り戻すという理念を発信するため、活動を続けています。

2012 年度につきましても、観察会、シンポジウム、談話会のイベントを開催し、当会の理念を発信するとともに、課題の共有を図りました。また、情報の発信では、ニュースレターの発行及びホームページによる情報提供を行っています。

講師派遣につきましても、ホームページを閲覧した方などからの問い合わせが数多くあり、遠方からの依頼も増えています。ホームページやニュースレターなどのメディアで広く発信することも大切ですが、当会の理念を伝え環境再生を進めていくため現場に出て地域の方から直接お話を聞き、関わってゆくことも大変重要であると感じています。講師として依頼先への情報提供だけでなく、当会としても現地の方々との交流ができることや様々な環境を実際に見て得られる知見などメリットがあると感じています。さらに、これらの体験や事例についてニュースレターなどを通じて会員みなさんに発信することができますので、引き続き講師派遣を重要事業と位置づけ推進していきたいと考えています。



理事会等報告

2013年9月29日事務局会議を開催し、シンポジウムの詳細を決定。

2013年11月4日再度事務局会議を開催し、シンポジウム当日の動きを最終確認しました。

また、3月の談話会について内容を検討しました。

矢島稔名誉会長

平成25年度日本動物学教育賞 をご受賞

画期的なご発想のもとに作られた豊島園の昆虫館、NHKラジオ「夏休みこども科学電話相談室」における30年以上にわたる名解説、そして数々の賞も受賞されてきた子供向け多数の著書など、「昆虫を含めた自然とのふれあいが人間形成の大きな柱になる」というご信念のもとのご活動成果が認められ、この大変名誉あるご受賞となりました。

ホタルのニュースレター（第61号）

2013年 12月25日発行



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

〒197-0011

東京都福生市福生487（日本ホタルの会事務局）

TEL&FAX：042-530-2111

e-mail：mail@nihon-hotaru.com

URL：http://www.nihon-hotaru.com

印刷 青森コロニー印刷

東京都中野区江原町2-6-2

TEL：03-5996-2761